The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	阪大日本語研究. 1999, 11, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』11（1999）

西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態

The Dynamics of the Aspectual Opposition in the Western Dialects of Japanese

工藤真由美
KUDO Mayumi

キーワード：トル形式、ヨル形式、トク形式、ヨク形式、語用論的条件

【要旨】

西日本諸方言には「シテ（テ形）＋オル（存在動詞）」の文法化によって成立した「シトル」系形式と、「シ（連用形）＋オル」から成立した「シヨル」系形式のアスペクト対立がある。平行的に、「シテ＋オク（配置動詞）」から成立した「シトク」系形式と、類推によって成立した「シヨク」系形式とのアスペクト対立も見られる。どちらのアスペクト対立においても、排除的対立から非排除的対立への平行的変化が見られるが、これはただちにヨル系形式、ヨク系形式の不使用化（消滅）を示すものではなく、発話（実際的使用）における機能上の変化を示すものであると考えられる。

1．はじめに

九州方言研究会を中心に、西日本諸方言アスペクトの地域差（バリエーション）の調査研究が進行中である。第2回目の調査結果がほぼ出揃った時点での中間報告を行ないたい。

第1次調査内容と第2次調査内容の概要は次の通りである。

第1次調査の内容と結果の詳細は、九州方言研究会（1997）ならびに工藤（1998 a、1998 b）を参照されたい。第2次調査の内容と結果の報告

書は現在、修正・印刷中である。

第1次調査の内容

①トル系形式もヨル系形式もともにアスペクト的意味は多義である。その多義性のありようを漏れなく記述する。

②トル系形式、ヨル系形式ともに、アスペクト的意味は、動詞自身の語彙的意味と相関する。従って、動詞のタイプ化を行い、タイプごとに漏れなく記述する。

③テンス的には〈現在時〉、ムード的には〈叙述法〉、ヴォイス的には〈能動態〉、極性的には〈肯定〉の場合について、まず以上のアスペクト記述を行なう。

第2次調査の内容

④テンス的には〈過去時、未来時〉、ムード的には〈決意法、命令法〉、ヴォイス的には〈受動態、使役態〉、極性的には〈否定〉における、アスペクト的意味の記述を行なう。

第2次調査の結果、トル／ヨルのアスペクト対立は、すべての文法的カテゴリーに存在していることが明らかになった。(ただし、読んジョル、読ミョールなどの音声的バリエーションはある。)

読んドル－読んドレ－読んドッター読まれトル－読ませトル－読んドラン

読みヨル－読みヨレ－読みヨッター読まれヨル－読ませヨル－読みヨラン

と同時に、トル系形式とヨル系形式を中心に記述を進めたにも関わらず、〈決意法、命令法〉における、次のような、トク（チョク）形式とヨク形式のアスペクト対立の実態が明らかになった。トク／ヨク対立は、意志動

詞に限定はされるが、動詞のタイプの限定はなく、主体変化動詞、主体動作客体変化動詞、主体動作動詞すべてにある。

・さきに行っトクよ。
〈終了限界達成後の段階（意図的結果達成）〉
さきに行きヨクよ。
〈終了限界達成前の段階（意図的進行）〉

さきにケーキ、つくっトクよ。
〈終了限界達成後の段階（意図的結果達成）〉
さきにケーキ、つくりヨクよ。
〈終了限界達成前の段階（意図的進行）〉

ちゃんと本、よんドクよ。　〈終了限界達成後の段階〉
本、よみヨクよ。　〈終了限界達成前の段階〉

・さきに行っトキ（トケ）。
〈終了限界達成後の段階（意図的結果達成）〉
さきに行きヨキ（ヨケ）。
〈終了限界達成前の段階（意図的進行）〉

さきにケーキ、つくっトキ（トケ）。
〈終了限界達成後の段階（意図的結果達成）〉
さきにケーキ、つくりヨキ（ヨケ）。
〈終了限界達成前の段階（意図的進行）〉

この本、よんドキ（ドケ）。　〈終了限界達成後の段階〉
この本、よみヨキ（ヨケ）。　〈終了限界達成前の段階〉

この形式は〈意志動詞〉に限定はされるが、ここに見られるアスペクト

対立は、トル／ヨルのアスペクト対立に、形式的にも意味的にも、平行的である。

シトル系形式←［シテ（テ形）＋おる（空間的存在動詞）］
〈限界達成後〉
ショル系形式←［シ（連用形）＋おる（空間的存在動詞）］
〈限界達成前〉

シトク系形式←［シテ（テ形）＋置く（空間的配置動詞）］
〈限界達成後〉
ショク系形式←［シ（連用形）＋置く（空間的配置動詞）］
〈限界達成前〉

三重県津方言のようにトル形式しかない方言には、それに対応してトク形式しかない。が、トル／ヨルのアスペクト対立をなんらかのかたちでもつ諸方言では、トク／ヨクのアスペクト対立も成立している傾向がある。この対立が、〈類推〉の結果として生じたものであるとすれば、この事実は、トル／ヨル対立の強固さを示すものであると言えよう。

だとすれば、トル／ヨルの対立のあり方と変化過程、トク／ヨクの対立のあり方と変化過程とを、統一的眺望から捉える必要性に迫られる。

Coseriu(1973)が述べるように、現実の言語が「動的な均衡における制度」「体系のたえまない構築」であるとすれば、あるいは「すべての時点で、確立された体系と進化とを同時に含んでいる」とすれば、現在進行中の調査研究は、単なるアスペクト調査を超えて、最終的には、生成する体系をその動的諸相において捉える枠組み設定に向けられた試みでもある。

2．トル／ヨルの排除的対立

今回の西日本諸方言アスペクトの地域差（バリエーション）の研究をはじめるにあたっては、出発点的に、周防大島方言のような、トル／ヨルが、完全に相互排除的に対立しているタイプが念頭におかれていた。詳細は、

五十川（1984）参照。（＊印は非文法的であることを示す。）

シチョル：〈終了限界達成後の段階〉

- 雪が積もっちょる。　〈結果〉
- つばめが巣ーつくっちょる。　〈結果〉
- まさくん１日でこいだけ読んじょる。　〈形跡〉
- 雨が降っちょるけ、スピード出しんさんな。　〈形跡〉

ショール：〈終了限界達成前の段階〉〈反復〉

- こがーんとこでせみが死にょーる。　〈変化過程〉
- けんちゃんが本読みょーる。（＊読んじょる）　〈動作過程〉
- 外は雨が降りょーるよ。（＊降っちょる）　〈動作過程〉
- 赤ちゃんがボタン口に入りょーる。　〈将前〉
- 人にあげるお菓子、もーちょっとで開きょーった。　〈将前(非実現)〉
- 金曜日にはねー、いっそ（イツモ）寿司食べに行きょーるんよ。（＊行っちょる）　〈反復〉

この方言では、シチョルが、〈変化過程〉〈将前（非実現）〉の場合だけでなく、〈動作過程〉〈反復〉でも使用できなくて、トル／ヨルの対立が完全に相互排除的なのであるが、管見の限り、このような記述報告はこの方言のみであった。（ただし「思う」のような状態性動詞では、両者のアスペクト対立がなくなる。）　従って、このような完全に相互排除的な対立を示す方言、つまり意味的に等価的対立を示す方言が他にあるのか、ないとしたらどのような違いがあるのか、その違い（バリエーション）にはどのような法則性があるのかの実態調査がまずは必要となったのである。

3．トル／ヨルの非排除的対立

現在までのところ、以上のような周防大島方言とまったく同じアスペク

ト対立を示す方言はでてきていない。が、次のようなかたちでの連続性が見られ、バリエーションが非法則的ではないことを示している。動詞のタイプとの関係については工藤（1998 a、1998 b）も参照されたい。

(1) トル、ヨルの２つの形式を使用する方言においては、〈結果〉〈痕跡〉〈効力（経験・記録〉のような〈終了限界達成後の段階〉を表すのは、トル系形式だけであって、この点における方言間の違いはまったくない。

(2)〈終了限界達成前の段階（進行過程)〉〈反復・習慣〉を表す場合には、ヨル系形式とともにトル系形式が、質的程度差をもって使用されうるようになっている。「歩く、飲む」のような主体動作動詞（非内的限界動詞）の〈進行過程〉をトル系形式でも表現できるようになると、その〈反復・習慣〉もトル系形式でも表現するようになる。

(3)〈開始限界達成前の段階（将前)〉、〈非実現（過去)〉はトル系形式は表せずヨル系形式のみである。また、このアスペクト的意味は、ヨル系形式単独では表せず、「死ノーデシヨル（シトル)、死ノーゴトシヨッタ（シトッタ)」のような分析的表現形式で表す方言が見られる。このような分析的形式になると、トルを使おうとヨルを使おうとそのアスペクト的意味の違いはほぼなくなる。

(4) 周防大島方言に最も近いのは、北九州方言Ａ（77 歳女性）と大分方言（39 歳男性）である。

北九州方言Ａでは、トル／ヨルの対立は、「読む、見る、歩く、遊ぶ、降る」のような非内的限界動詞(主体動作動詞)でも相互排除的であって、〈動作過程〉を表すのにトル系形式が使用されることはない。〈反復・習慣〉をトル系形式が表すこともない。が、〈将前（非実現)〉の意味をヨル系形式が表せない点が異なる。（なお、この方言でも

「思う」のような状態性動詞ではトル／ヨルのアスペクト対立はなくなる。）

大分方言は、〈将前（非実現）〉の意味をヨル系形式が表せるが、非内的限界動詞（主体動作動詞）の〈動作過程〉〈反復・習慣〉において、トル系形式が使用できなくもない。が、他の方言ほど使用されやすい状態ではないとの報告がある。

(5) 興味深いことに、同じ北九州方言であっても、42歳女性の内省（北九州方言Ｂ）では、以上の77歳女性の内省とは、次の点で異なってきている。

①非内的限界動詞（主体動作動詞）の〈動作過程〉〈反復・習慣〉は、ヨル、トルの２つの形式の使用が可能である。

②「開ける、作る、落とす」のような主体動作・客体変化動詞（内的限界動詞）ではヨル系形式だが、トル系形式が絶対的に使えないわけではない。

③しかし、「死ぬ、消える、行く」のような主体変化動詞になると〈変化過程〉であれ〈反復・習慣〉であれ、ヨル系形式のみである。これは、ヴォイス対立と連動していて、「太郎がお母さんに押入に入れられる」のような〈変化主体〉が主語になる受動文では〈変化過程〉はヨル系形式のみであって、トル系形式は使用できない。トル系形式だと〈結果〉の意味である。

④〈将前（非実現）〉の意味をヨル系形式が単独で表せる場合もあるが絶対的ではない。

(6) このタイプ（北九州方言Ｂ）が、最も多いタイプである。

重要なことは、北九州方言Ｂ型のどの方言においても、特に非内的限界動詞（主体動作動詞）の場合に〈動作過程〉や〈反復・習慣〉の意味をト

ル系形式でも表現できるようになったとはいっても、これがただちに、ヨル系形式の衰退（不使用）には、つながってはいないことである。実際問題、トル系形式が依然として〈結果〉〈形跡〉〈効力〉の意味を表すとすれば、場面・文脈的あるいは構文的支えがなければ、「読んドル、歩いトル、降っトル」がどちらのアスペクト的意味なのかが決定できない。

〈動作過程〉を明示しなければならない時にはヨル系形式が選択され、場面・文脈的支えがある場合には、ヨル系形式でもトル系形式でも可能であるというのが実態であると考えられる。

だとすれば、周防大島方言あるいは北九州方言Ａのような、使用場面から自立した〈完全に相互排除的な構造的対立〉から、実際の使用場面における語用論的条件と相関する〈機能的使い分け〉へと変化していると言えそうである。

これは文法体系の「崩れ」を意味するものではないであろう。そして調査結果を見る限り、ヨル系形式の使用は衰えてはいない。ただ、語用論的条件があれば、トル系形式も使用できるようになっているという点において、語用論的条件との相関性の下で、文法的対立関係が、排除的な対等関係から、排除的ではない非対等関係へ変化してきているのであろう。

	語用論的条件	対立のあり方
周防大島方言型：	非関与	相互排除型
北九州方言型：	関与	非相互排除型
	〈場面的支え無＝限界達成前段階はヨルのみ〉	
	〈場面的支え有＝限界達成前段階はヨルとトル〉	

このように考えなければ、次に述べるトク／ヨク対立がなぜトル／ヨル対立と平行的に存在しているのか、あるいは成立してきたのかが説明できないであろう。

4．トク／ヨクの排除的対立

日高貢一郎氏の指導のもとに作成された田口（1992）によれば、トク系形式とは違って、ヨク形式の成立は比較的最近であり、高年齢層ではあまり使用されないとある。（筆者の母語である愛媛県宇和島方言でも、1974年時点において、ヨク形式は若い世代で使用が見られるようになった形式であり、中高年層ではあまり使用されていなかったと思われる。）

従って、次のような〈類推〉の結果、ヨク形式が生じた可能性が高いと思われる。

トル（チョル）：ヨル＝トク（チョク）：X　　X＝ヨク

〈類推〉による新しい形式の生成は、パラディグマティックな対立関係抜きには不可能である。このようなトク／ヨク対立は、今回の調査では、次の諸方言で報告された。（ただし、広島市では命令法の場合は使用されない。）

［トル／ヨルと平行してトク／ヨクのある方言］
福岡県（北九州市、宮田町、福岡市、前原市、小郡市、久留米市）、佐賀県佐賀市、熊本県竜ヶ岳町、大分県（大分市、竹田市）、山口県小野田市／広島県広島市

［トル／ヨルの対立はあるがトク／ヨクの対立がない方言］
愛知県犬山市、兵庫県相生市、岡山県岡山市、長崎県長崎市、宮崎県清武町

ところで、このような意志動詞におけるトク／ヨクの対立は、トル／ヨル対立が意志動詞、無意志動詞に関わらず存在しているとすれば、トル／ヨル対立では表しきれないアスペクト対立を表すために存在しているのではない。実際、今回の調査でも、トル／ヨルと競合して使用されている

（場合が多い）のである[*1]。

・さきにいっトクよ／いっトルよ。
さきにいきヨクよ／いきヨルよ。

ちゃんとケーキつくっトクよ／つくっトルよ。
さきにケーキつくりヨクよ／つくりヨルよ。

ちゃんと本よんドクよ／よんドルよ。
さきに本よみヨクよ／よみヨルよ。

・さきにいっトキ（いっトケ）／いっトリ（いっトレ）。
さきにいきヨキ（いきヨケ）／いきヨリ（いきヨレ）

ちゃんとケーキつくっトキ（つくっトケ）／つくっトリ（つくっトレ）。
さきにケーキつくりヨキ（つくりヨケ）／つくりヨリ（つくりヨレ）

ちゃんと本よんドキ（よんドケ）／よんドリ（よんドレ）。
さきに本よみヨキ（よみヨケ）／よみヨリ（よみヨレ）。

従って、トク／ヨクは、話し手（１人称）の意図性を明示する必要がある場合に特に使用される。トル／ヨルは、意図性の有無に関わらず（３人称であっても）使用できるからである。

・お母さんがちゃんとケーキつくっトルよ。〈叙述（記述）〉
ちゃんとケーキつくっトルよ。〈叙述(記述)／話し手の意図(決意)〉
ちゃんとケーキつくっトクよ。〈話し手の意図（決意）〉

・お母さんがケーキつくりヨルよ。〈叙述（記述）〉
　さきにケーキつくりヨルよ。〈叙述（記述）／話し手の意図（決意）〉
　さきにケーキつくりヨクよ。〈話し手の意図（決意）〉

さて、この意図性（モダリティー）と絡み合ったトク／ヨクのアスペクト対立は、トル／ヨル対立が相互排除的な（つまり〈動作過程〉にトル系形式を使用できない）北九州方言A（77歳女性）では、やはり相互排除的である。（この77歳女性による内省記述を考えると、トク／ヨク対立の成立は、北九州方言では従来の指摘より古い段階である可能性が高い。）

しかしながら、トル／ヨル対立が非排除的対立へと変化している多くの方言では、それに平行的に、トク／ヨク対立のあり方も非相互排除的になっている。

5．トク／ヨクの非排除的対立

北九州方言Aを除く他の方言では、次のような傾向が見られる。これらは、トル／ヨル対立のあり方および変化の傾向と平行している点で興味深い。

(1)〈限界達成後の段階〉を表すのはトク系形式のみであって、ヨク系形式が使用されることは、どの方言においてもない。

(2)〈限界達成前の段階（意図的進行）〉を表すのは、北九州方言A（77歳女性）ではヨク系形式のみであったが、北九州方言B（42歳女性）では、非限界動詞（主体動作動詞）「読む」の命令法の場合のみ、ヨク系形式とともにトク系形式が使用される。（ただし、決意法の場合はヨク系形式のみである。）

　このように他の方言でも〈限界達成前の段階（意図的進行）〉を表す場合には、ヨク系形式だけでなくトク系形式の使用が、なんらかのかたちで見られるようになる。

　そして、このようなトク系形式の使用のしかたは、標準語のシテオ

ク（シトク）形式とは異なるものであって、標準語のシテオクは〈動作過程（進行）〉は表せないのである。

・さきに本を読んでいるよ。　〈限界達成前（動作過程）〉
　ちゃんと本を読んでおくよ。〈限界達成後〉

・さきにケーキを作っているよ。〈限界達成前（動作過程）〉
　ちゃんとケーキ作っておくよ。〈限界達成後（結果）〉

以上の事実は、トル／ヨル対立が相互排除的な方言では、トク／ヨク対立も相互排除的であり、前者が非相互排除的対立へと変化した方言では、後者もそれに平行して変化していくことを示していると言えよう[*2]。

(3) トル系形式しかない津方言では、トク系形式しかないが、このトク系形式の意味も、トル系形式の意味に平行している。この方言の特徴は、トル系形式が、若干の状態性動詞を除く大部分の動詞において動詞のタイプに関わらず、〈限界達成後の段階〉のみならず〈限界達成前の段階（動作過程・変化過程）〉を表す点にある。これに平行して、トク系形式も、〈限界達成後の段階〉のみならず〈限界達成前の段階〉を表せるのである。このトク系形式の意味も、標準語とは全く異なっている。

・先にいっトルよ。〈限界達成後・前〉
　先にいっトクよ。〈限界達成後・前〉

・ケーキつくっトルよ。〈限界達成後・前〉
　ケーキつくっトクよ。〈限界達成後・前〉

・本よんドルよ。〈限界達成後・前〉
　本よんドクよ。〈限界達成後・前〉

以上、トル／ヨルの排除的対立を出発点に据えることを前提にした場合における、トル／ヨル対立のあり方、変化の方向と、トク／ヨク対立のあり方、変化の方向との平行性について述べた。

6．意味的対立と有標・無標性

これまでの2回の調査を通して、トル／ヨル対立が絶対的な相互排除的対立をなしている方言はほぼ出てきていない。しかしながら、実際の発話（談話）上、場面・文脈的支えがなく、〈限界達成前の段階〉を明示しなければならない場合には、ヨル系形式の方が選択されるのであれば、トル／ヨル対立のあり方は、発話（談話）上の機能と絡み合うかたちで、そのアスペクト対立を保持していると考えるべきであろう。この観点は、意図性というモダリティーと絡み合うトク／ヨク対立の成立を説明するためにも必要であると思われる。

しかし同時に、「連用形＋オル、オク」が文法化したアスペクト形式の方ではなく、「テ形＋オル、オク」が文法化したアスペクト形式の方が、その本来的なアスペクト的意味〈終了限界達成後の段階〉を保持しつつ、〈終了限界達成前の段階〉をも表せるというかたちで、文法的意味の拡大（一般化）を進めていることは、中央語の歴史、あるいは東日本諸方言との比較対照上、興味深いものがある。

西日本諸方言アスペクトの特徴は、「連用形＋オル」と「テ形＋オル」のパラディグマティックな対立化にあるのだが、この西日本諸方言においてもなお、「テ形＋オル」が文法化された形式の方が、文法的意味が一般化されており（されつつあり）、〈意味的〉対立上の〈無標〉項となっている（なろうとしている）のである。（ただし、この無標性は、限界達成の前後性に無関心になるという意味ではない。また、形式上は、トル、ヨルともに有標である。）

Comrie(1987)の第6章には次のような指摘があり、他言語における具体例が提示されている。『アスペクト』(むぎ書房) より引用しておく。

> すべての対立がしるしづけられていないメンバーとしるしづけられているメンバーとからなりたってはいないだろうし、そうである必要もない。いくつかの対立において、すべてのメンバーがひとしくしるしづけられていることもある。さらに、しるしづけられ性は、完全にしるしづけられているか、それともなにひとつしるしづけられていないかの選択ではなさそうである。なぜなら、対立によってはメンバーのあいだのしるしづけられ性の違いがきわめておおきかったり、はるかにちいさかったりしていて、しるしづけられ性にさまざまな程度がありうるからである。
>
> しるしづけ無しのカテゴリーの意味は、おおくの場合、しるしづけられている片われの意味をとりこむことができるのだが、このことはもっとも決定的な基準のひとつである。しるしづけ有りのカテゴリーの意味をおもてだって表現することがつねに随意である、というような場合があるが、このような状況がもっともわかりやすい例である。つまり、しるしづけ有りのカテゴリーが適切であるような場面においてさえも、つねにしるしづけ無しのカテゴリーを使用することができる、というような場合があるのである。

西日本諸方言アスペクトの動態の研究は、言語的対立における markedness value に関わっても、今後、意味上、形式上、使用頻度上の諸側面にわたる興味深い日本語の具体例を提示できると思われる。

7．今後の課題

今後第3次調査を実施する予定であるが、次の2点が主要なものとなろう。

①アスペクトと敬語（待遇性）との関係について

木部暢子氏の教示によれば、また第2次調査でも部分的に確認できたところによれば、次のような敬語と絡み合うアスペクト対立も存在している。

・先生が学校にいきゴザー。　〈限界達成前（進行）〉
　先生が学校にいっテゴザー。〈限界達成後（結果）〉

・先生が窓あけゴザー。　〈限界達成前〉
　先生が窓あけテゴザー。　〈限界達成後〉

・先生がお酒のみゴザー。　〈限界達成前〉
　先生がお酒のんデゴザー。　〈限界達成前・後〉

興味深いことに、この場合でも「飲む、読む、歩く」のような非内的限界動詞では、「シテ＋ゴザー」の形式の方が、〈限界達成後〉とともに〈限界達成前〉をも表せるようになっている。この形式が〈老年層〉を中心に使用される形式であるとすれば、早い段階で「シテ＋ゴザー」形式は〈動作過程〉を表せていたことになろう。

さらに、より新しい、待遇性と絡みあうアスペクト形式である「シテアル」においては、例えば博多方言では、次のように〈限界達成前の段階〉も〈限界達成後の段階〉も表してしまうようである。この形式が、「シ（連用形）＋アル」とのアスペクト対立をもっていないとすれば、主体変化動詞であれ主体動作動詞であれ、〈進行過程〉も〈結果・形跡〉も表すようになる。（待遇性との絡み合いがあるか否かの問題を別にすれば、この点は、津方言のトル形式の意味用法と共通していて興味深い。）

・先生が学校にいっテアル。〈進行〉〈結果〉
・先生が窓あけテアル。　〈進行〉〈結果〉

・先生がお酒のんデアル。　〈進行〉〈形跡〉

②現在までのところ、三重県津方言に近いタイプのもの、あるいは、ヨル系形式が非常に限定された条件でしか使用できなくなっているタイプの方言が出てきていない。今後、地域を増やして、津型のバリエーションがどのようなかたちで存在しているかの確認・記述が必要となろう。

現在の標準語のアスペクト体系は、日本語のアスペクトの１つの実現形態であろう。標準語のアスペクト体系のありようを相対化しつつ、諸方言を含めて総体的な日本語の観点から、体系化のバリエーションとその動態の共通性と差異性を追求することが、今後必要であると思われる。

（本稿は、1999年１月９日に九州大学で行なわれた九州方言研究会での報告に基づくものである。出席者の方々から貴重な教示を得た。記してお礼申し上げます。）

【注】

＊１ヨク形式には、「読みヨイタ」「読みヨイテ」のような過去形、依頼形式はないようである。この場合は、「読みヨッタ」「読みヨッテ」が使用される。なお、筆者の母語である愛媛県宇和島方言の場合、次のような対立もある。

・先生が来るまで本読みヨコウや。　〈限界達成前〉
　先生が来るまでに本読んドコウや。〈限界達成後〉

＊２宇和島方言では、主体動作動詞（非内的限界動詞）の〈動作過程〉では、トル形式の使用が可能であるが、トク形式の使用は不可能であって、常にヨク形式である。（ただし、若い世代では可能となっているかもしれない。今後調査が必要である。）

・お父さんがビール飲みヨル／飲んドル。
・ここでビール飲みヨクよ。／＊飲んドクよ。

ここでビール飲みヨケ。／＊飲んどけ。

【引用文献】

五十川緑（1984）「周防大島方言におけるショールとシチョル」『国文学解釈と鑑賞』49-1.至文堂

九州方言研究会編（1997）『西日本諸方言アスペクトの地域差に関する報告書１』鹿児島大学法文学部木部研究室

九州方言研究会編（1998）『西日本諸方言アスペクトの地域差に関する報告書２』鹿児島大学法文学部木部研究室（修正・印刷中）

工藤真由美（1998a）「西日本諸方言のアスペクトの記述をめぐって」『日本語研究』18.東京都立大学国語学研究室

工藤真由美（1998b）「西日本諸方言と一般アスペクト論」『言語』27-7.大修館書店

田口聡子（1992）「大分方言における「ヨク・チョク」の実態」『国語の研究』17.大分大学国語国文学会

Comrie,B.(1987) *Aspect.* Cambridge UP.（山田小枝訳『アスペクト』むぎ書房）

Coseriu,E.(1973) *Sincronía, diacronía e historia.* Madrid.（田中克彦・かめいたかし共訳『うつりゆくこそことばなれ』クロノス）

くどう　まゆみ（文学部教授）